



2008年(平成20年)
9月号(No. 760)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL●<http://www.jac.or.jp>

e-mail●jac-room@jac.or.jp

目次

JACヒマラヤ環境調査隊の活動

JACの新しいジャンルを拓くべく	
躍動した多彩な人材	1
地震による観察会バス事故のその後	4
大日岳の事故と事件の謎	5
東西南北	6
秩父宮殿下とマッターホルンの羊羹	
史占春名誉会員の近況	
カトマンズの書店	
活動報告	8
集委員会	
委員会紹介	9
山岳編集委員会	
支部だより	10
山形	
図書紹介	11
図書受入報告	12
新入会員	12
ルーム日誌	13
会員異動	13
INFORMATION	14
さんけん通信	15

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

JACヒマラヤ環境調査隊の活動 JACの新しいジャンルを拓くべく 躍動した多彩な人材

山川陽一、箕岡三穂

温暖化の影響で氷河湖の拡大が加速している。慶応大学の福井研究室では、エヴェレスト山麓のイムジャ氷河湖に、常時、監視できる環境を整えた。同研究所が再訪する時期に合わせ、日本山岳会は環境調査隊を組織、各種調査を行なった。その結果を報告してもらう。

今回の日本山岳会によるヒマラヤ環境調査の企画は、次のふたつの大きなテーマを持っていた。

- ①慶応大学の福井プロジェクトに協力して、イムジャ氷河湖下流域の環境調査を実施する。
- ②エヴェレスト街道の山歩きを楽

しみながらカラパタル登頂をめざす。

前者だけならば、いわゆる学術調査隊ということになるだろうし、後者だけならば、どこのツアー会社でもやっているヒマラヤのトレッキングツアーと変わるところは

ない。ふたつのテーマを同時に掲げたことが、この企画を新鮮で魅力あるものに仕立て上げ、多くの方たちから支持を受け、多くの会員の参加を得た最大要因であった。

舞台がエヴェレスト街道というゴールデンコースだったことや、調査テーマが「地球温暖化に伴って引き起こされるGLOF(氷河湖の決壊洪水)の影響度調査」という時宜を得たものであったことも働いて、たちまち募集人員を超える参加申し込みがあり、第二隊を追加編成することになった。

ここに、隊員たちの活躍の一端を紹介したいと思う。

人口調査グループの活動

(リーダー||富澤克禮)
温暖化問題を取り上げたテレビ



イムジャ氷河湖で合流した一隊、二隊の全メンバー

朝日開局50周年特別番組(2008年3月放映)のなかで、イムジャ氷河湖が決壊したとき影響を受ける下流域の人口が1万人と紹介されていたが、それがいつの季節にいつのデータなのか、ひと

口に下流といってもどこからどこまでを指しているのか、住民だけなのかトレッカーも含めた数字なのか、出所はどこかなど、根拠不明なものであった。

われわれは、ルクラからチュクンまでの9集落について、戸数、人口(男女、年齢階層、人口の盛衰の4項目について実地の聞き取り調査を行なった。その結果、戸数518戸、人口2440人(男1036人、女1404人)という結果を得た。男性が少ないのは労働人口が地域外に流出する影響であろうか。この2440人に、トレッカー(年間2万人)やシエルパおよびポーターを加えた数が実際の影響人口になろう。

今回調査対象外だったルクラより下流域の人口がどうか、地域有力者からの聞き取りという方法がどれほどの正確性を持っているかなどいろいろ問題はあるが、われわれの調査は、そもそも人口統計や住民登録などと無縁の世界で行なわれた初めての实地調査であったことは、特筆に値すると思う。

住民の意識調査グループの活動 (リーダー＝平野裕也)



タンボチェで聞き取り調査をする人口調査グループ

あらかじめ用意した14項目の設問について、ルクラからチュクンに至る9の集落の住民50人に対して個別インタビューを行なった。被面談者は、極力各集落に長く居住する住民を選び、インタビューは2人一組で、ネパール語、シエルパ語が話せ、日本語も理解できるシエルパのサーダーを通訳として行なわれた。

設問は、氷河湖の存在や決壊洪水発生の可能性などにかかわるもの(第1グループ)、降雪、気温、雨量、川の水量など気象状況の変化にかかわるもの(第2グループ)、野生動物や植物の状況など生態系の変化にかかわるもの(第3グループ)など合計14項目である。

詳しくは報告書をご覧いただく

ことにして、第1グループでは、かなりの人(36名)が上流の氷河湖の存在を知っており、そのうち18名が将来、決壊洪水が起これと答えている。起これと答えた人の何人かは「人為の結果が神の怒りをおこして起こる」と考え、また「お祈りしたので起こらない」と考えている人たちがいたことは、少数意見とはいえ無視できないものがある。「ネパール・ヒマラヤの山岳地帯で、村落共同体の維持に果たしてきた宗教の歴史的役割は軽くない」(古市進)ということか。

第2グループで注目すべきことは、人それぞれ表現は違うが、ほぼ全員が山の雪が昔と比べて少なくなつた、居住地の雪も少なくなつたと答えたことである。ここヒマラヤでも温暖化の影響は確実に現われていることを証明している。

第3グループでは、答えが割れ、野生動物が増えた3割、減った5割、植物も減ったと答えた人が6割いる反面、増えたと答えた人もかなりの数に達した。これは、観光客や人口増に伴う森林の伐採や乱獲が大きな影響を与えてきた反面、サガルマータ国立公園の指定によって伐採や狩猟禁止の規制が

強化され、植林も始まっていることによるものであろう。

測地グループの活動

(リーダー＝西田進)

この領域は、当初われわれには手に余るのでやめようと考えたのであるが、西田会員が強い熱意を示してリーダーをかつて出してくれた。出発前にグループで福井教授を訪ねてリクエストを聞き、さらに使用測量機器(レーザー距離計、コンパス、グラス、GPS、デジタルメ)を使つてのリハースルを行なうなど非常に意欲的であつた。実際に調査は、決壊洪水が起きたとき影響を受ける可能性のある民家、ロッジ、橋、発電所、畑など22カ所についての川面からの比高調査、2カ所の橋付近の川の断面形状計測である。

この調査の延長線上に決壊洪水に対するハザードマップの作成があるが、それにはさらに本格的な調査活動が必要であり、今回の調査は「ハザードマップ作成に資するデータを取得することのフィージビリティを確認すること」(西田)に留まつた。特筆すべきは、山岳地帯において容易に使用でき



14項目の設問をした意識調査グループ

る安価でハンディな計測機器類で相当な事ができると実証したことである。

「ハザードマップ作成に向けた今後の課題としては、民家の河川水位との位置関係計測の手法を人口調査の精密化と連携させることがわれわれのチーム内で可能な発展形態のひとつであろう」(古市進)

ゴミ処理・トイレ問題・通信インフラ・ポーター擁護

(第二隊リーダー古野 淳)

第二隊は、福井プロジェクトの支援チームとは別に、独自チームを掲げて調査にあたった。ここで調査内容の全部を紹介することはできないが、ゴミ処理問題の一端に触れておこう。

ナムチェのNGOサガルマータ・ゴミ管理団体「SPCC」は、1991年からクインプエリアのゴミ管理に取り組んできた。SPCCの組織は、人材、資金、活動すべてが自己完結しており、国内外の直面する山岳地ゴミ問題を解決する方法論として参考になることが多い。

年間(2006年度)の予算規模は670万ルピー(1140万円)で、その収入の7割がエヴェレスト・アイスフォールの通行料である。クインプエリアに35カ所52個のゴミ箱を設置し、26人のスタッフが管理にあたっている。1990年発足した日本のHAT-Jがこの地方のゴミ問題に果たした貢献も大きいものがある。ルクラにあるゴミ焼却炉はHAT-Jが寄贈したものである。SPCCの活動によって街道沿いのゴミは年々減っているが、故エドモンド・ヒラリー卿、田部井淳子さんらの啓蒙活動が果たした役割も忘れてはならない。

JACは多士落々、捨てたものではない!

下山直後、われわれは、カトマ



ハンディな計測器で測量する測地グループ

ンズのホテルで、今回の企画について隊員からホットな感想を聞いた。個々の意見は非常に興味深いものがあるが、ここでは残念ながら紙面の都合で割愛せざるを得ない。みんなの意見を集約すると「今回のプランへの参加を決めるにあたり、強い山への憧れに加えて、地球温暖化に対する危機感や山の環境問題に対する関心が後押しをしたこと、集まったメンバーは多士落々だったこと、住民のための調査活動でありシステムである以上、民意を理解し重視した調査とシステム構築が福井プロジェクトに望まれること、JACとしてなんらかの形で今後も今回のような活動を継続的に行なうことが望ま

しいと考えていること」などであった。

宮下会長も報告書の巻頭言で、「山登りだけでなく、社会、文化、学術など各方面に豊かな経験と知識を持った人材が数多くいることは、日本山岳会の大きな財産である。そんな会員たちが楽しみながら社会貢献できる今回のような活動は、今後の日本山岳会のひとつの活動領域を示しているのかもしれない」と述べている。

近年、われわれ日本山岳会では、高齢化の負の側面だけがクローズアップされてきたくらいがあるが、今回の活動を終えて「JACも捨てたものではないぞ!」という実感があつた。

＊

『日本山岳会ヒマラヤ環境調査隊報告書』

2008年日本山岳会ヒマラヤ環境調査隊の報告書が完成しました。82ページのうちエヴェレストをはじめとするカラー写真が8ページあります。予冊が若干あります。興味のある方には一部1000円にて頒布いたします。

申し込みは箕岡三穂(042-776-1788)まで。

トピックス

地震による観察会バス事故のその後

大地震のため観察会行事のバスが横転落下し負傷者が出たことについては、会報『山』7月号で報告しました。多くの会員の方々から励ましとお見舞いの言葉をいただき、ありがとうございます。

8月29日、最後の1名も退院し、菊池支部長ともどもリハビリに励んでいます。観察会を企画実行した者として、あれだけの大きな事故で死者が出なかったから良かった、ではすまされないものがある」と自問しております。

今回の「ブナ原生林を守る会」観察会への支部の協賛は支部総会で決定した行事ではなく、観察会、登山教室といった支部の公益事業の取り組みに対する私の強い思いから菊池支部長に働きかけ、今後の公益活動のステップになればと協賛をお願いしたものでした。

公益活動の一環として

「ブナ原生林を守る会」は近藤会員を中心に結成された「焼石自然

小野寺正英（岩手支部）

「を守る会」が始まりです。登山道周辺のブナ林伐採中止要請を出しましたが、その後、焼石岳の秘境「生出川」流域原生林伐採計画が発覚しました。あそこだけは残したい、そんな強い思いが住民運動に発展し、焼石岳周辺一帯を今後伐採しない「保護林指定」を取り付けました。なお、林野庁施行計画は5年ごとに見直しがあり、その時に改めて反対意見が出されなければ、元通りの伐採計画が進むことになっています。

緑のダムの核である広葉樹を残すことは多目的ダムの機能維持につながると思っております。また、ダム工事終了後、工事跡地には植物の種子が吹き付けられ緑化が進められますが、それは外来種の植物で、生態系に異変を起こす心配があります。日本土木学会の亀山氏が胆沢町で「公共工事の跡地の緑化は地域の植生で復元すべき」と講演し、翌年には土木学会も同じ提言を新聞発表しています。



6月14日の岩手・宮城内陸地震で転落したバス

それでも外来種は植え付けられており、私達が水源地の保全を進めているダム工事現場でも表向きには地域植生を口にしながらも外来種が植えられています。今それを防止しなければならぬ、そんな思いで、自然観察を兼ね、工事完了後のダムの環境保全もしていこうと行動中でのバス事故だったのです。

支部活動といえない状態のなかで年度計画に公益活動としての計画を組み入れるに当たって、「試行錯誤もあり」と理解を示してくれた菊池支部長を負傷させてしまいました。

いま支部会員への説明がもっとも大事であると思っています。そ

して岩手支部ではどのような形で公益活動をするのかなどの課題に、支部内でもっと議論しながら取り組まなければならないことを、今回の事故で再認識させられました。

PTSDと被害者救済

バス転落の翌日、保健所の担当者からバス搭乗者のPTSD（心的外傷後ストレス障害）、精神的苦痛について調査したいと連絡がありました。7日後、事故の時に窓から脱出した12名と軽傷の2名が、専門家の聞き取り調査に応じました。

また、50日後の9月4日には、退院された菊池支部長を含む17名が出席して、神戸赤十字病院診療内科医の講義を受けました。入院した6名はもちろんですが、脱出した12名のなかにも「自分は助かったが、出してくれた人は重傷を負ってしまった」などと思い悩んでいる人たちもいます。いずれにしても長期の心のケアが求められると思います。

次に保険金の話ですが、バスの自動車保険、一日旅行保険も地震特約がなければ適用外でした。私たちが加入する山岳保険全般にい

えることは、保険特約条項で「地震、噴火、津波、ビッケルなどの用具を用いる山岳登攀」の事故は保険金の支払いはできないとあることです。私たちは二つの山岳保険に加入

オピニオン

大日岳の事故と事件の謎

竹勝生

会報『山』8月(759)号で、

重廣恒夫氏の「早期再開が待たれる大学山岳部リーダー冬山研修会」を読んで、かつて読んだ本『北アルプス大日岳の事故と事件』(斎藤惇生・著/ナカニシヤ出版刊)から受けた疑問が再燃してきた。

疑問は二つある。一つは、今後の事故予防策に、二つ目は日本山岳会の体質に関わることであり、いずれも重要と考えるので意見を述べる。

この事故で刑事事件と民事事件が起こり、その争点はいずれも巨大雪庇の予測可能性にあった。刑事事件は、予測不可能、と判断され不起訴となった。一方の民事訴訟富山地裁の一審判決では、「講師らが、雪庇の大きさを正確に予見することは不可能であったが、雪

入していますが、今だ支払い請求に対する返事はありません。災害により生じた医療費は個人負担です。負傷者が安心してリハビリを受けられるよう模索しております。

庇全体の大きさが25メートル程度あることを予見することは可能であった。

講師らの登高ルートおよび休憩場所の選定判断には過失がある(略)」としている。その根拠として、「地元の登山家である佐伯郁夫

(証人証言)は、(略)残雪期である5月ごろ、大日岳山頂付近には、吹き溜まりの部分が20メートル程度の雪庇が残っており、(略)冬期には全体の大きさが25メートル程度の雪庇が形成されるであろうことを認識していた」ことをあげている。

私の第一の疑問は、なぜ佐伯氏の認識(情報)が事故前に登山研修所を通じて講師に伝えられ、生かされなかったかという点である。氏のように有力な方の重要情報が、地理的にも近い登山研修所に伝えられていなかったとは考えがたい

ことである。伝えられていたけど生かされなかったとしたら、それはなぜか。その辺りのことをよく検証して、今後の事故予防策に役立ててほしい。

私の第二の疑問は、なぜ佐伯氏の証言が業務上過失致死罪の時効の後に明らかにされたかという点である。これにより講師の不起訴と損害賠償訴訟の和解が成立したのであり、登山仲間とご遺族にとって不幸中の幸いという結果になったことは評価すべきかもしれない。しかし、それは山仲間の世界での評価であり、一般の人には理解しがたいことである。

この事件には多くの日本山岳会会員が関与しており、結果して情報操作をした疑いを感じられる。死亡したのは国の補助を受けている大学生であり、和解金の支払いは国庫からであり、それらの支出の元は国民の税金であるから、一般人の人が納得できる説明をする必要があると思う。

今、わが会は社団法人から公益法人への道を模索しているが、このことは従来の仲間内だけで通用する常識から、一般の人にも受け入れられる理念への意識の転換を

伴わなくては成し得ない、と思う。

今回、文部科学省から出された安全検討報告会報告書の間まじめに關する意見募集に当たって、一般国民から広く意見を求め、提出された意見を十分に考慮することを求めているのは、登山界の有識者が構成する安全検討委員会に全幅の信頼をおいていない証拠ではなからうか。

私も、冬山研修会の早期の再開を願っているが、そのためには上記の疑惑を解明することが先決であると思う。

東西南北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

秩父宮殿下と マッターホルンの羊羹

岡澤祐吉

今年の夏は、ヨーロッパ見学を希望する中二の孫息子を連れてツエルマットを訪れ、何年ぶりかでマッターホルンを眺めた。

ウィンパーの話は孫も予備知識として持っていたようなので何も話さなかったが、この時、横有恒さんが秩父宮殿下とマッターホルンに登ったときの話で、まだ本会の誰も知らない事実のあったことを思い出した。そこで、この機会にご披露することにした。

横さんの『わたしの山旅』にある1926年8月31日、マッターホルン山頂で、殿下の担ぎ上げた羊羹で大正天皇の誕生日を祝った、という出来事があった。このとき殿下は、スイス駐在の有吉公使が

献じた太く重い羊羹を、松方三郎さんがわざと携帯品から取り除こうとする計略にかけられて、殿下ご自身で担ぎ上げるようになった。このことを山頂で松方さんが告白し殿下ともども大笑いした、ということである。

有吉公使がなぜわざわざ太くて重い羊羹を献じたのか、という点について、われわれは松方さんの甘いものの好きに思いが及ぶ。このことで、松方正義の子どもである三郎さんを知っている有吉公使の配慮を優先して考えてしまうのだが、もう一つ、明治天皇の信頼が厚かった初代侍従武官長の三女、末子が有吉公使夫人であったことを忘れているようである。

武官長の子どもたちは、父親が甘いものに眼のなかった明治天皇から何回となく下賜されるチョコレートや羊羹などの甘さを身にしみて経験していたのである。羊羹

の甘さは、三女の末子にしてみれば、明治天皇に直結しているのがある。そのときのマッターホルン登山は、明治天皇からすれば皇子の誕生日を、皇孫殿下の一行が山頂で祝おうとしていたわけである。松方三郎さんがこの件に触れたものを読んでも、有吉公使夫人が天皇の大寵臣などと新聞に書かれたりする侍従武官長（陸軍大将）の娘であることを知っていた様子は見えない。

横さんは「松方君の告白に殿下は初めて計られたことを知り大笑いであった」と書いているから、有吉公使夫人のことを殿下は何も知らなかったとも考えられる。しかし、かりに秩父宮殿下が有吉公使からその点をお聞きになつていたらとしても、殿下のお人柄からすれば、そのことを山頂で皆にお話しになり、その場の雰囲気壊すようなことはなさらなかったと思う。

なおこの件は同姓の誼で、筆者が岡澤精侍従武官長の縁者から、聞き知った次第である。

史占春名誉会員の近況

平林克敏

北京オリンピック委員会の友人より招待をいただき、8月8日の開会式に出席してきました。その機会に当会名誉会員の史占春さん（1988年推薦）のご自宅を訪ね、久しぶりに楽しい懇談のひと時を過ごすことができました。

氏には、中国登山を通して知り合った親しい会員の方々が日本の各地におられますが、健康が優れなかったこともあり、皆様にお会いすることができずにおられました。最近はずいぶん体調もよくなられ、散歩の折には車椅子を利用してのことでしたが、家の中ではステッキもつかずに歩かれ、生活の様子から察して健康状態も徐々に快復の兆しが見えました。しかし、往時の深い思いもあるためか、海外の友人に会う事を避けておられるとの事でした。

氏の家は北京市の中心、崇文区東四托南街ですから、体育館路の近くになります。中国の一部の住宅は、今や日本を超えるほどの住



史占春氏の自宅にて（左が史占春）

環境が整い、私もいささか驚くほどでした。美しい閑静なマンションで奥様と2人、今は悠々自適の日々をお過ごしです。私の会社（住友ゴム工業）に7年あまり勤務していたことのあるご長男の史岩君の案内で面談してきました。

応接の壁には懐かしい写真が所狭しと掲げられていました。1960年、75年のチョモランマ登頂以来、往年の氏の功績を偲ぶものでした。中国の国家元首はもとより、日本山岳会やその関係者の方々との思い出の詰まったものでした。

氏と私を中心となつて進めた1985年の日中友好ナムナム二合同

登山や、当会の実施した日・中・ネ三国友好チョモランマ・サガルマタ合同登山などが、特に思い出深い出来事として写真の中から見て取れました。当時を振り返り、懐かしい限りでした。

日本山岳会の関係者の皆様には、くれぐれもよろしくとの事でした。

カトマンズの書店

鈴木正規

5月の連休を利用して、7年ぶりに家人とカトマンズに出かけた。2人でリキシャ（人力車）に乗って、カトマンズの本屋をゆつくり見て回った。ニューロードや王宮前のダルバールマルグには、高級店がたくさん並んでいた。そのなかを、ウインドーショッピングしながら興味のありそうな本屋を探したが、以前より本屋がなくなつたように感じた。

各書店とも本の値段がバラバラで、ちよつと買いくらいの点もあった。また新刊書は少なく、5年から10年前の本が多く並べてあるのも印象的だった。ほしい本があつても値段を聞く

と、目の玉が飛び出るほどふっけられるので注意が必要である。おそろおそろ、次の2冊を買い求めた。

1冊は『PEAKS OF GLORY』、大判の写真集だ。イタリアの出版社ホワイト・スターが編集した英訳版『栄光の頂』というタイトルで、ヒマラヤ黄金時代の登山史を紹介したもの。内容は、ヒマラヤおよびカラコルムを第一章とし、アルプスの山、南極の五章からなつていて、実にうなずける素晴らしい原書だ。

2冊目は『UBERLEBT』、メスナ1の8000¹⁴座登頂の記録本だ。この本は、邦訳書として、日本では『生きた、還った』というタイトルでおなじみのものだが、原書だけに素晴らしは格別だ。

家人が長い時間を書棚に目を向けて買い求めた本は、『EVEREST the best writing and pictures from seventy years of human endeavour』。確か12、3年前のエヴェレスト初登頂40周年記念に発刊された原書だと思う。いまだに、日本での邦訳のないのが残念である。

2人で買った原書は、いずれも写真集のような本だ。何度見開い

ても飽きのこない憎いほどの豊富な写真ばかりで、実に美しい。

カトマンズはヒマラヤの都市だからだろうか、東京の丸善よりも山の本がずつと多いのには驚いた。書店のウインドーを見ているだけで、胸がワクワクするほどうれしくなるカトマンズであった。



活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

集会委員会

薬師・水晶・烏帽子岳に行く

8月9日から13日、アクティブシニア12人が炎熱地獄の首都圏を逃れ、北アルプスの最奥部に入山した。前夜泊を入れて5泊6日、平均年齢65歳の私たちにとって、夏山合宿ともいえる裏銀座縦走である。

折立から大町までアルプスのど真ん中を東西に横断する行程は水平距離で約45^{km}、歩程にして35時間とタフではあったが、全員歩きぬいた。雪溪から吹き上げる爽やかな風、たくましく可憐な花たちドッシリ構えたアルプスに抱かれた6日間であった。幸い全行程が快晴に恵まれ、「浩然の氣」を養うには十分すぎるほど気力、体力、チーム力が充実し、下山した時の達成感はいままでもない。

初日、標高1356^mの登山口

にある年輪を重ねたトチの巨木は静かに迎えてくれた。登頂する3峰へ標高差1600^mの歩みは、まず太郎平への4時間である。昔、無医村だった有峰の村人にとって、医者代わりに祈った山が薬師岳だと聞く。木道をひたすら歩き、太陽に焼かれた稜線歩きに喘ぎながらも、雪溪に出合うとホッとひと息。イワツメグサやフウロウソウ、キンバイは今が盛り。トウヤクリンドウ、キヌガサソウの残滓は早や夏の終わりを告げている。

頂上の立山大権現に拝礼し、昭和38年厳冬期、東南稜に迷い込んだ愛知大学生の遭難碑に詣でてから黒部川源流に入る。薬師沢はよい水、おいしい水が豊富な別天地であった。400^mの急登を登り切ると、雲ノ平は山岳庭園の奥座敷だ。

続いて仙境とか深田文学に称される水晶岳にかかる。昨年7月に



黒部川源流山群の最高峰、水晶岳に登頂して

新築された水晶小屋では、幾多の苦難を体験されたオーナーの心象「山の意志として自分が生きるこ」とが許されるのだ」を拝する。霧の中からライチョウ親子が遊びにきた。

槍ヶ岳手前の荒々しい硫黄尾根を展望、休憩していると、大学ワングル部に会い、拍手を送る。「WV」と縫込んだ30人の黒シャツ姿は颯爽としていた。山が若い世代に受け継がれている。

野口五郎岳を通過し烏帽子岳直下に入ると、ヒョウタンボク、ナカマドの実が錦秋を待っている。石囲いに守られたコマクサや岩に

寄り添うウラシマツツジも稜線を飾る。高さ100^mほどの鶏冠のような岩峰を攀じ登ると大樹林帯を俯瞰できた。烏帽子小屋と頂上の標高差は105^mだが、水平距離では1500^mに近い。硫化水素らしい極彩色の貯水湖が垣間見えるが、そこが目指す下山地である。

最終日、14度C、冷涼な朝焼けの中を高瀬ダム目指し、①から⑫の標識のある樹林帯を1300^m下る。濁沢の瀬音が響くと勇氣凛々。ダケカンバの巨木群から針葉樹林を抜けると、ブナ立尾根に安らぐ。樹々がますます深く、芳香漂う原生林である。色とりどりのギボシ、クガイソウ、マルバダケブキ、ヒメシヤジンなど楽しめたが、河川敷のアンニンゴの実まで気づいた仲間に舌を巻く。偶然にも山中で静岡、名古屋の支部会員と出合い対話したが、JAC全国ネットは頼もしい。

かくて天地澄みわたる9時、ロックフィルダム堰堤上で大休止。大町「薬師の湯」で心身とも癒された後、裏銀座縦走に乾杯し、知恵と知識を分かち合ったパーティーの完走に感謝した。

(石岡慎介)

委員会紹介

日本の登山界を俯瞰する百年の歴史

山岳編集委員会

古本市に出かけると『山岳』が並べられているのを時どき見かけることがある。第六十年台のものだと、ヒマラヤ登山に情熱を傾けていた人の本だったのかなと思ひ、第九十年台のものだと、この人は山岳会にあまり魅力を感じなかったのかなと思う。

『山岳』を作る側は、常に会員に興味を持って読んでもらいたいと思っているはずであるが、もちろんそれは編集方針との兼ね合いである。日本山岳会には対会員という見える対象とは別に、日本の登山界や世界の登山界という、より大きな位置づけのなかでトピックを考えていく必要もあり、大多数の会員の主たる興味が個人的・一般的・日常的な日本の山歩きであ



1906年創刊の第1年第1号の表紙

登山史的な視野に立つて

つたとしても、どちらかといえば非日常的な活動、登山史的な記録を集めざるを得ない事情がある。

幾度か同様の疑問をもたれる会員があつた。すなわち、日本山岳会なのだから「日本」の山を中心に編集すべきだというのが、もちろん現在でも地域研究や登山史の分野などにはフィールドが広がっており、いつでも掲載できる状況にある。逆に日本以外の地域では、限られた山域に記録が集中する傾向があり、それが時代ごとに移ってゆく。いまは中国の南東部やチベットの記録が多い。言うまでもなく未知の要素がそこに残っているためである。日本人は雷同型が多いためか広く世界の珍しい山に登る人はごく少ない。日本国内の場合と同じである。

『山岳』は創刊から百年を超え、日本で最も歴史の長い山岳専門の定期刊行物になった。『山岳』とい

う誌名が示すごとく、登山も含む山岳に関する全般的な関心に対応できる雑誌として創られた。日本で山と登山に関心がある者は、『山岳』の壮大な目録を繙かずして日本の山も登山も語れないことを悟るだろう。『山岳』が取り上げていない項目も少なくないが、日本の登山、登山界に関する限りはおよそそのところは網羅されているはずである。『山岳』の編集者たちはこの伝統を引き継ぐべく今後とも苦心をしなければならぬだろう。

今後の課題

さてこれからの『山岳』はどのようなあるべきかということになる。内容に関しては従来のようにオールラウンドで行きたいが、間口を現代風に合わせて、山に関係があれば何でも、というようには広げないつもりである。例えば自然保護であるが、里山保全や植林活動などは日本山岳会の専売ではなからう。またアウトドアだからといって釣りやキャンピングやマウンテンバイクは圏外である。以前には通じていなかった道の整備や、情報収集手段の発達によって山の調査が可能な時代になってき



創立70周年記念にマナスル三山をカバーにした『山岳』

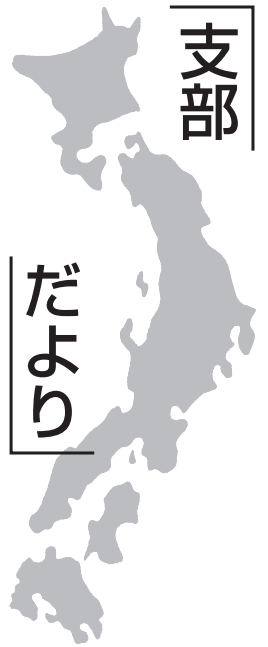
た。登山能力を駆使して高山や奥山の限られた自然を研究し、ぜひとも『山岳』に発表してもらいたいものである。

雑誌の体裁については、古すぎるといふ意見と、今のままの質素な体裁が好ましいという意見がある。活字を大きくするとか、横書きにすると判型を変えねば読みにくくなるし、そうなると大きさによっては本棚に収まらなくなる。好みや感じ方は人それぞれであるが、最小限の変更を、様子を見ながら進めていきたい。昨年は用紙をクリームから白に変えた。このことによりグラビアページがなくなり本文中に自由に写真が使えるようになった。本年は表紙の装丁を変えることを考えている。

(児玉茂)

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

初夏の蔵王エコ登山

支部では昨年度から自然環境の保全や安全登山推進のために、一般の登山者を募集した山行を年1～2回、実施してきました。

今年度は6月29日、蔵王山を会場に「山岳環境保全」を同じ目的に掲げる「HAT-J山形支部」と共催で第1回目を実施。コースは刈田岳駐車場→馬ノ背→五色岳→熊野岳→石室避難小屋というもので、45名の参加者が集まりました。当日は西日本・東日本で梅雨前線が活発化し、東北地方も低気圧の影響で雨が降り続き、五色岳は無理かと思われました。しかし、強烈な晴れ男晴れ女がいたようで、刈田駐車場から馬ノ背まで登ってくると雨は止みました。

曇天ながら思ったより眺望がきき、エメラルドグリーンの水をた

たえた御釜や湖面の対岸の五色岳の荒々しい断崖など蔵王らしい壮大な景観に圧倒。群生するイワカガミの可憐なピンクやハクサンチドリ、の紅紫色が曇天に映え、1～2株ほどのコマクサの開花も見ることができました。

馬ノ背からかなり下って時計と反対回りに御釜の火口を巡り、五色岳へと向かいました。五色岳から御釜の水辺まで下つてくると思わず歓声があがり、鋭いエメラルドグリーンの湖面に触れたり、足を浸したり、口に含んだりして、みんな童心に返って大はしゃぎしました。

その後、降りだした雨は大粒となり、ガスも湧いてきたので当初の予定であった熊野岳は諦めましたが、当会会員のインストラクターのガイドのおかげで、あまり踏み入れることのない御釜をぐるり一周し、初夏の蔵王にみな満足し



エメラルドグリーンの湖面と五色岳の断崖をバックに

て下山しました。雨模様の登山もまたいいものでした。

第2回目は秋の鳥海山を会場にして、東北公益文科大学教授で本会会員の高橋英彦氏を講師に、ス

俳句

塩見岳・蝙蝠岳行

こうもり

木苺やぬるき酸味のほとばしり

吹く上ぐる霧の雫や鳥兜

這松の脂おそろしき新松子

雷鳥の砂浴びの窪あたたかし

砂礫地に迫りて低しお花畑

山頂展望図青富士を起点とす

ケッチ登山を企画しているところ
です。

（佐藤映子）

広渡敬雄

燐寸箱大きかりける夏炉かな

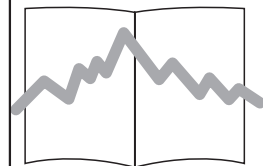
農鳥岳は雲に隠るるちんぐるま

夏の月まつたしケルン影を引き

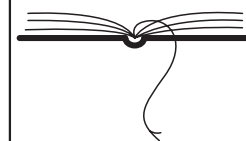
朝焼けに向かひ稜線下りけり

しばらくは雪溪の端踏んでゐる

竜胆を霧が揺らしてゐたりけり

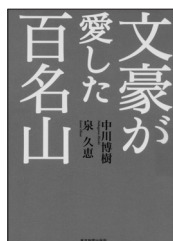


図書紹介



中川博樹・泉久恵・共著

『文豪が愛した百名山』



2008年7月
東京新聞出版局刊
A5判 222頁
定価 1500円

体の成果だけとは決して考えない作家がいて、いわば擬人化した山を主人公にすえて描いた文学作品が、深田久弥の『日本百名山』だったと筆者は考えている。

近年、山はいよいよスポーツの場ではなく、深田の書いた内容はなおさらに、選ばれた山名ばかりがまるで国のお墨付きのようにもはやされ、行脚されるようになったのは誰しもが知るところで、その山に登る方法にのみ終始した本も数多く出版された。

しかし、さすがにそのブームも一段落した。今回紹介する本の著者は、従来のガイドブック的な要素を最小限とし、本来語られるべき深田百名山の内容について新しい視点から再考することにした。すなわち、古今37人の文学者の作品に現われた百名山を吟味したのである。

およそ文学とは文章を駆使して

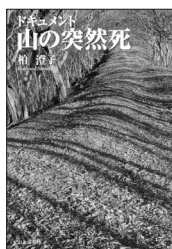
人を描くことで、山もその材料のひとつにすぎない。スポーツ的登山から量産された紀行文には、初登頂などの華々しい事実の助けがあればまだしも、誰が作者であってもいっそうにかまわないような文章が多い。これは、実に拘泥することが、かえって人を描く妨げになることを示している。

必ずしも山に登るわけではない文学者たちの作品に百名山はどう使われ、どんな効果を発揮したのだろう。本書には登山者による山の文学を考えるヒントがある。

（長澤 洋）

柏 澄子・著

『ドキュメント 山の突然死』



2008年7月
山と溪谷社刊
A4判 224頁
定価 1680円

突然死は原因の特定が難しい。とりわけ登山における突然死は心電図や採血といった基本的な検査すら困難なことが多く、死因に迫ることに苦慮することが多い。

著者はこの困難な題材を、症例

の行動や普段の生活ぶりを丹念に洗い出すことにより、そこから何が炙り出されて見えてくることを訴えている。

最初の3症例は、56歳から59歳の中高年登山者に見られた突然死である。遭難者の仕事ぶりや普段の生活、問題となる登山に至る準備、アプローチ、登山経過の詳細を語るにより、死因の特定に迫りながら、実は登山者が日常生活で何を為すべきかに言及している。

突然死は、決して登山の経験不足からくるものではなく、若いころから十分な経験を重ねてきても、年齢を重ねるに従って肉体に変化が現われ、加齢が遠因になって起きるという事実。登山を続けるためにはどんな生活をし、どのような検査をして、登山に参加するためには何を知らなければならないかが示されている。

後半の2症例は必ずしも中高年に限った問題ではなく、高所登山に見られた問題症例である。高所順応をうまくしなければ生きていくのが困難な低酸素環境で、いわゆる高山病以外の疾患や死亡があり得ることが示されている。静

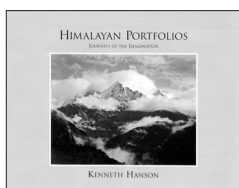
脈血栓症のみならず、高所でみられる心肺にかかる負荷が数多く存在する。そうした環境に対し、準備できることもあるし、準備できないこともあるかもしれない。しかし、今回の遭難者の生活を考察してみると、もう少しこうしていればよかったかもしれないという要素が見えてくるのである。

中高年登山者には、ぜひ一読してもらいたい本である。

(塩田純一)

Kenneth Hanson・著

『HIMALAYAN PORTFOLIOS
JOURNEYS OF THE IMAGINATION』



2008年
Fields Publishing刊
28センチ×35センチ 190頁
\$ 85

著者はバイオ化学の専門家で、1985年から2005年までの20年間、ヒマラヤ訪問を繰り返していた。この本は、ヒマラヤの写真集および解説書である。モノクロームの大きな写真を主に配した第一部5章と随筆、地質学的解説

などの第二部5章から成る。

第一部ではヒマラヤを大きく5つの地域に分けている。各章の写真の前に見開きの2ページを設け、各地域の地図、歴史や登山史などが紹介され、読者には貴重な情報となっている。また、各写真には懇切丁寧なキャプションがあり、興味をそえられる。

第一部第1章、Kashmir: ヒスパール氷河、バルトロ氷河、インダス河周辺の峻峰と、ラダックやカルギルの生活が30ページにわたり写し出されている。なかでも19〜22ページの4枚のビアフオー氷河のパノラマ写真は圧巻だ。

第2章、Hidden Realm: 西ネパール・ドルポ地方の文明から遠く離れた山間、僻地の光景やそこで暮らす人たちの生活に焦点を当てた写真が並ぶ。第3章、Kailash Gaidak: カリ・ガンダキを中心にした中央ネパール、ダウラギリやアンナプルナ山塊の深谷、巨峰群の写真が目惹く。

第4章、Everest: エヴェレストほかローレルワリン、クーンブ地方の山々の魅力的な写真とチベット側からの4葉の写真もある。第5章、Great Snow: カンチェンジュ

ンガを含む東ネパールを舞台にし、カンチ北西面の写真は特に迫力がある。

第二部第1章、Foreword: 学位を有したプロ・ガイド、Mr. Doug Chabotが序文で登山は「軽量、素朴、大胆」な行動を!と述べている。第2章、Essay: 旅に必携のカメラに続き、ヒマラヤの仏教、秘境、自然、歴史的な役割、国際紛争の狭間のヒマラヤ、アルプスからヒマラヤ登山へ、生と死など著者の研究結果と登山に対する姿勢がうかがえる。

第3章、Geology: ヒマラヤの地質学的解説。第4章、Technical Information: カメラとフィルムについて書かれている。そして第5章、Acknowledgementsで関係者へのお礼などを述べ、締めくくっている。

縦28センチ、横35センチのページを繰るだけで、ヒマラヤを訪問した気分になさせてくれる。

(南井英弘)

* 図書紹介欄は図書委員会が担当しており、図書委員会からの執筆依頼が原則です。寄稿される場合も、必ず事前に図書委員会にご連絡ください。

図書受入報告 (2008年8月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
松方恭子(編)	妻におくった九十九枚の絵葉書——伊藤愿の滞欧日録	335p / 22cm	清水弘文堂書房	2008	出版社寄贈
三浦章男(著)	岩木山・花の旅——カラーガイド	357p / 21cm	北方新社	2008	著者寄贈
山本進吾(著)	山は命の母——夫婦で登った日本三百名山	623p / 22cm	白山書房	2008	出版社寄贈
三宅修・三宅岳(著)	心の山登り——親子が山で教えられたこと	237p / 19cm	リヨン社	2008	出版社寄贈
剣山クラブ(編)	剣山から考える霊峰と自然保護	52p / 19cm	剣山クラブ	2008	著者寄贈
尾野益大(著)	シャクナゲ夢の森——夫婦で育てた徳島「岳人の森」物語	99p / 21cm	岳人の森	2008	著者寄贈
剣山クラブ(編)	四国山地のブナ	59p / 19cm	剣山クラブ	2006	著者寄贈
箕岡三穂・平野裕也(編)	日本山岳会ヒマラヤ環境調査隊報告書	79p / 30cm	日本山岳会	2008	著者寄贈
岩橋崇至(著)	ロックガーデン	18p / 37cm	樹花舎	2007	著者寄贈
Kenneth Hanson	Himalayan Portfolios—Journeys of the Imagination	190p / 28×34cm	Fields Publishing	2008	出版社寄贈
Stephen Goodwin (ed.)	The Alpine Journal 2007 (1857-2007)	18p / 37cm	The Alpine Club	2007	発行者寄贈

平成20年度「海外登山基金助成登山計画」募集 海外登山基金委員会

日本山岳会は登山界の活性化を目指して優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。

20回目となる今回も、困難を求めての挑戦、発想の新鮮さ、夢多い計画などユニークな登山計画を支援したいと考えています。

登山には多様なスタイルと発想があるはずで。ピークを目指すだけの登山ではなく、新しい課題に挑戦していく意欲も大切なことでしょう。パイオニア精神にあふれるさまざまなジャンルの計画であれば歓迎したい、と考えます。会員資格や単独、パーティ等の条件は問いません。奮ってご応募ください。

記

- 対象 平成21年2月1日～平成22年1月末に海外の山へ出発する登山隊
- 申込方法 所定の様式(事務局にご請求ください)に記入し、登山計画書(15通)を添えて申請してください。
- 申込締切 平成20年12月31日
- 審査と助成期間 平成21年1月中旬に審査、2月の理事会で決定、助成。なお、対象となった登山隊は後日、登山レポートの提出をお願いします。JAC会報「山」に掲載します。
- 助成金総額 120万円(平成19年度実績)
- 問合せ・申込先 日本山岳会事務局
電話 03-3261-4433

5日 常務理事会 二火会

4日 総務委員会 アルパインスキークラブ

2日 三水会 SUN燦会
4日 総務委員会 アルパインスキークラブ

ルーム日誌
8月

■8月の理事会は夏休みのため休会でした。



6日 集會委員会 山岳地理クラブ
7日 海外委員会 学生部
14日 自然保護委員会 会報編集委員会
15日 学生部
18日 総務委員会 海外委員会
アルパインスキークラブ

会員異動(8月)

物故

川崎精雄	(3043)	08・8・14
森田健	(6460)	08・8・19
加藤高志	(9078)	08・7・31
有馬純	(9370)	08・8・3
畑中耕一	(11831)	06・3
田邊喜久	(12668)	08・7・25
山本兼太郎	(13671)	08・7・23
浅井千策	(14154)	08・7・22
退会		
福田哲郎	(11245)	
永楽倶楽部山岳会	(11819)	
宮川理一	(12576)	

19日	00会 ゆきわり会
20日	自然保護委員会 総務委員会 山岳地理クラブ つくも会
22日	海外委員会 三水会 01会
25日	海外委員会 資料・映像委員会 アルパインスキークラブ
26日	インターネット小委員会 千葉支部
27日	自然保護委員会 定款検討委員会 麗山会
28日	山遊会
8月来室者 331名	

第40回 新入会員オリエンテーション

シヨンお誘い

2007年9月(08年8月)の入会者が対象です。日本山岳会の組織と活動状況、ルームや図書室の利用方法の説明と山岳会グッズ販売、各委員会・同好会案内などを行ないます。また、会長をはじめ各役員と同期入会者の懇親会も開催します。ぜひご参加ください。

期日 10月25日(土)、日本山岳会
ルーム(詳細は別途ご案内)



インフォメーション

◆講演会開催及び現地観察会

京都新聞、京都府山岳連盟後援
京都支部

■講演会

日時 10月15日(水)18時30分～20時

演題 「丹後半島の100年間の
景観の変化」講師 深町加津枝 (京都府立大学
准教授)

場所 京大会館102号室

*入場無料 (共益事業の一環)

■現地観察会

日時 11月23日(日)10時

申込 酒井展弘 (〒617-0003 向日市森
本町東の口15-13)

FAX 075-922-2102

*申込者に詳細を送ります

◆第12回森の勉強会(伊勢神宮の
森) 東海・関西・京都支部共催

日時 11月8日(土)～9日(日)

場所 三重県伊勢市「神宮会館」
及び「伊勢神宮宮域林」

内容 8日12時神宮会館集合、

講演会 9日11時
ドスタデイ、15時解散

講師 酒井章子 (生態学)

定員 30名

申込 10月10日までに小川務宛
(☎487-0033 春日井市岩成台3
-4-11)E-mail: ataclub@bridge.ocn.ne.jp

*申込者に詳細を送ります

◆第18回山を語る 近藤等名誉
会員が語る「アルプスの山と人」

図書委員会

近藤等名誉会員に、G・レビュ
ファ、A・コンタミス、中野融な
ど多彩なアルピニストとの登攀か
らアルプス登山の過去・現在・未
来を語っていただきます。

日時 10月22日(水)18時30分より

進行 飯田年穂 (明治大学教授)

場所 日本山岳会104号室

問合 三好まき子 (TEL 090-80
19-8601)E-mail: 344mm@mbe.nifty.comE-mail: jacseminar@everest.co.jpE-mail: jacseminar@everest.co.jp

◆秋の大和二三を歩く

集会委員会

高松塚古墳、石舞台、畝傍山、
香具山、耳成山を歩きます。現地
集合・現地解散。

日時 11月1日(土)～3日(月)

費用 2万7000円 (宿泊、現
地交通費他)

定員 20名

申込 10月15日までに山崎浩子宛
(FAX 045-782-8712)E-mail: y.hiro@fca3.so-net.ne.jp

*申込者に詳細を送ります

◆「道迷い」講演会

医療委員会・指導委員会共催

道迷い研究の第一人者であり、
欧米諸国の山岳レスキュー事情を
視察してこられた先生から興味深
いお話を伺います。

日時 11月15日(土)14時～16時

場所 四谷・主婦会館プラザエフ

講師 青山千彰 (関西大学総合情
報学部教授)

費用 1000円 (資料代)

問合・申込 10月末までに左記宛
(FAX 033-3437-8849)E-mail: jacseminar@everest.co.jp

◆土曜会放談会開催 新土曜会

懐かしの土曜会を再現します。

どなたでも参加できます。

第26回図書交換会の出品図書募集
について図書交換会を09年3月に開催予
定です。本棚に眠っている本をお
寄せください。出品図書は10月末
日までに、会員番号と電話連絡先
を明記して「日本山岳会・図書委
員会」宛にお送りください。雑誌
類は原則としてお断わりします。頒布価格は図書委員会に一任く
ださい。特に希望がある場合はご
連絡ください。頒布が成立した場
合は、価格の8割を出品者にお返
します。成立しなかった図書は、
送料受取人払いでお返します。

詳細は会報『山』1月号に掲載。

問合 三好まき子 (TEL 090-80
19-8601)

日時 10月4日(土)15～17時

場所 山岳会集会所

問合 箕岡三穂 (FAX 042-776
-1788)E-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jp

◆会津の山 (第4回) 二火会

江花会員が同行します。往復マ
イクロバス使用。

日時 10月7日(火)～8日(水)

場所 鬼面山と厩岳山
(うまやさん)

集合 JR三鷹駅北口

定員 18名

費用 2万2000円 (宿泊・マ
イクロバス代)E-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jpE-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jpE-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jpE-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jpE-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jpE-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jpE-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jpE-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jpE-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jpE-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jpE-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jpE-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jpE-mail: kic1937@theia.ocn.ne.jp

● さんけん通信 ●

夏こそゆったり山研で

山研管理人 内野慎一

まだ8月末だというのに、お盆の頃のきつい陽射しが懐かしく思われます。今年の夏、上高地は天気の好い日が多く、夕立もあり、昨年より夏らしい天気だったように思います。

白馬の大雪溪で崩落があった8月19日は、上高地でも大雨でした。中千丈沢で土砂が押し出して、橋の高さまで堆積してしまったため、濁った川の水が道路にあふれ出しました。夕方、雨が上がったあとも、道路上に残った石や土砂を取り除き終わるまで一時通行止めになり、バスも止まりました。

山研の水源の善六沢ももちろん濁りに濁りましたが、幸い土砂の押し出しなどによる影響はありませんでした。西穂側よりも、中千丈沢のある霞沢岳側の方が降り方が激しかったのか、などと推測しています。

さて今年の夏、山研はお盆頃までとぎれること

なく宿泊利用がありましたが、人数的にはそう多くありませんでした。一方、山小屋はシーズン最盛期で混んでいますから、下山時に山研に泊まって「山ではよく眠れなかったけれど、ぐっすり休めた」と帰途につかれる方もいらっしゃいました。

実際に、相部屋になったのは8月にわずか4日間だけで、ほかの日は1グループで1部屋使っていただきました。ただし、山研ではゆっくり過ごせても、行き帰りの交通機関は混雑しますから、ゆっくり山を楽しむには少し時期をずらすなどの工夫をされると良いと思いますし、すでにそう実行されている方が多いのかもしれません。

また、山研は自炊ということで二の足をふまれている方もいらっしゃるかもしれませんが、ご飯、味噌汁とビールはこちらでご用意できます。先日も土鍋とカセットコンロを使用したいという方がいて、暑いのに鍋料理かと思っていました。すると、調理済みのおでんのパックの封を切って鍋に移して、メイン料理の出来上がり。それにハムや野菜、漬物などを並べて、賑やかな食卓にされていました。

皆さんそれぞれのスタイルで、ゆっくり利用していただければと思います。

問合せ 金井一子 TEL 03-3714

17388

◆紅葉の両神山 ゆきわり会

秩父の名峰を訪ね、岩尾根をたどる山旅です。

日時 10月25日(土)～26日(日)

集合 9時西武池袋駅特急ホーム

費用 約1万5000円(交通費・宿泊代)

申込 10月10日までに皆川恵男宛

TEL/FAX 042-373-3003

*申込者に詳細を送ります

◆木崎甲子郎・土井庄一郎・松沢節夫三人展巡礼・山・旅・油絵展

ヒマラヤ、南極、スペイン、日本の山々などの近作を展示します。

期間 10月20日(月)～25日(土)

場所 銀座・スパアートギャラリー

問合せ 松沢節夫 TEL 042-1623

◆特別企画展「五百澤智也が描くふるさとの山々」

期間 10月25日(土)～12月14日(日)

会場 山形県郷土館「文翔館」2階ギャラリー

問合せ 山形県生涯学習文化財団

*入場無料

TEL 023-63515500

■訂正とお詫び

8月(759)号、6ページ4段25行「日本人では初めてです」は誤りでした。訂正してお詫びします。

◆編集後記◆

●この夏、山と溪谷社の主催で、涸沢でキャンドルナイトや映画祭、朝ヨガなどのイベントを行ないました。予想以上に多くの若い人たちが参加してくれて、彼らの山への熱い想いが感じられました。一方、山岳会の環境調査隊では、経験豊富な会員の方たちが存分に力を発揮されたようです。報告会でその意気ごみにふれ、今月の巻頭記事をお願いしました。

(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 760号

2008年(平成20年)9月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹

編集人 神長幹雄

Eメール jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社